

ティーチング・ポートフォリオ

心理学科 鷗沼 秀行

(記入日 : 2025 年 9 月 1 日)

1 教育の責任 (何をやっているか : 担当科目)

心理学統計法 (1 年前期必修科目 2 単位)、心理学統計法 (応用)(1 年前期選択必修科目 2 単位)、心理学実験 (基礎)(応用)(2 年前期必修科目、後期選択必修科目、各 2 単位)、認知心理学概論 (2 年前期選択必修科目 2 単位)、心理統計法特講 (1)(2)(大学院前期、後期選択必修科目、各 2 単位) など

2 理念 (なぜやっているか : 教育目標)

私の教育理念・目標は、学生が科学的方法によって心を理解し、さらに自ら問題を具体的に設定し、身の回りの人的・文化的資源と積極的に関わりながら、主体的に問題解決に至る態度を身につけることである。

3 方法 (どのようにやっているか : 実践の工夫)

今年度前期は全ての科目でこれまでの MS365 の Teams を利用をさらに活用するとともに、対面授業ではより丁寧な説明に修正した。心理学統計法においては、学生が持参する PC で Excel を使用させて統計計算を行わせた。その際に、教員もオンライン上の MS365 で学生と同時に入力と計算を示し、学生の入力と計算の状況を把握しながら授業進行することとした。大学院の心理統計法特講では、昨年度後期から、新たに R のスクリプトを毎回作成配布し、効率的に学修を進めることができるように準備した。

4 成果 (どうだったか : 結果と評価)

心理学統計法においては、エクセルファイルを事後に配布し、事後学修をうながした。学生による学修成果は Forms 課題で確認することができた (エビデンス 2)。大学院でも、Teams に課題を提出させ学修成果を確認できた。今年度は分析結果を文章化することに成果が認められたが、主体的に分析を計画する点で不十分なケースが見られた (エビデンス 1)。

5 今後の目標 (これからどうするか)

学部年の統計、大学院の統計に共通する事項として、基礎的知識の理解と実践的・応用的な問題解決技能の修得、そして自主的な学修と問題解決の姿勢に課題があった。今後、より基本的な事項についての受講生の理解を確認する

ステップを設けるとともに、応用的な課題を加えて問題解決技能の修得を促したい。引き続き自主的な学修を促す課題を工夫する試みを継続したい。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- 1 Office 365 Teams 各科目のグループ（非公開）
- 2 Foms 課題の結果（非公開）

ティーチング・ポートフォリオ

心理学科 氏名 田中 裕

(記入日：2025 年 9 月 3 日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

「心理学概論 (基礎)」「心理学実験 (基礎)」「基礎ゼミナール」「心理学ゼミナール」など。

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

教育理念・目標として、学生自身にも内在している身体および脳の視点から心を理解することを目指している。日常生活の中に根づいているこの視点を出発点として、自ら問題を具体的に設定し、身の回りの人的資源も使って主体的な問題解決に至る方向へ導くよう心がけている。さらに、自身の現状のレベルを認識させて、可能な限り個別対応をすることにより、学生の多様な個人特性に合わせた教育を行うように努めている。加えて、皆で学べる集団の維持形成しながら学びを深めることも理念・目標としている。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

自身に内在する視点から主体的な問題設定から解決に至る機会を作るために、心理学概論 (基礎) では可能な授業テーマ全てにおいて自身の身体を可能な限り意識させ、それが脳につながるようにした。その際に脳や身体についての補充的な学びを取り入れた。心理学実験 (基礎) では、自身の身体感覚 (重量感覚) を明確化して取り扱い、具体例提示を多くした。さらに相互協力によるレポート課題解決から、心と身体感覚の関連を検討させた。また、心理学ゼミナールでは受講生の個性に合わせた個別対応・個別指導の時間を長く取ることで、より綿密な指導を心がけた。さらに基礎ゼミナールでは大学の学びの基礎を個別対応に加え、形成された学びの集団の中で修得していけるように工夫した。

4 成果 (どうだったか：結果と評価)

心理学概論 (基礎) では、受講者のレベルに応じた授業資料使用の効果もあり学修過程において心と身体・脳を関連づけて考えようとしていることは確認されたが、身体と脳の知識と現実の理解をつなげることが困難な学生がかなり見受けられた。心理学実験 (基礎) ではレポート作成時に学生の現状レベルに合わせた別資料用意と具体例を多く提示し、相互協力による学びも進めたが上手くいかなかった。この原因は内容理解および学修成果の受講生間個人差にあると判断している。心理学ゼミナールでは受講者の個性に合わせた個別対応・指導が効果的であったため、学修成果がある程度上がったことが確認されたが、昨年同様学生の個人差が大きく集団での対応はかなり困難であった。基礎ゼミナールでは 3 およ

び4名の学び集団を形成しレポート作成を行わせたところ、集団内での情報共有・教え合いが上手くいき全体としてしっかりしたレポート作成できた（エビデンス 1 および 2）。それに加え、形成した集団内で助け合いも適切に行われて1年生前期の授業での長欠の発生が押さえられた（1年生の出席状況）。

5 今後の目標（これからどうするか）

どの授業においても、主体的な問題解決する方向を向かせることは困難であったと判断する。その原因としてこの数年の課題でもある個人差の問題があると推測している。つまり学生の基礎能力および興味に応じた受講レベルの設定がとても難しい現状である判断する。個別対応だけで補填できない事例も増えている。今年度基礎ゼミナールにおいては、学び集団形成によって、個人差を多少補うことができたと考える。次年度はこのような集団形成を他科目でも模索し、よりよい授業進行を工夫したい。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- 1 リアクションペーパー（非公開）
- 2 小レポート（非公開）

ティーチング・ポートフォリオ

心理学科 佐藤 哲康

(記入日：2026年2月28日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

【心理学科専門科目】

青年心理学 (2年次半期：選択必修科目 2単位)、心理実習 (基礎) (3年次通年：選択必修科目 1単位)、心理学ゼミナール (3年次通年：選択必修科目 4単位)

【他学科専門科目・教職課程科目】

教育心理学 (中高免許状 2年次半期：必修科目 2単位、児童教育学科 1年次半期：必修科目 2単位)、教育相談 (中高免許状 2年次半期：必修科目 2単位、児童教育学科 2~3年次半期：必修科目 2単位)、

【大学院科目】

臨床心理面接特論 I (大学院半期：選択必修科目 2単位)、臨床心理面接特論 II (大学院半期：選択必修科目 2単位)、心理療法各論 I (大学院半期：選択必修科目 2単位)、心の健康教育に関する理論と実践 (大学院 1年次半期：選択必修科目 2単位)

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

授業の理念や目標は学生が心理学または教育学の専門性を実践で活かすことのできる教育である。人材を育成するためには教科書だけではなく、臨床現場や地域での実践的な活動を通じて得られた、これまでの経験を現状に即して伝えることだと考える。教育を通じて得られた知識と社会に目を向ける応用力、柔軟な思考力と対応力を学生一人ひとりが身につけることも教育目標としている。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

全ての担当科目において、授業内容をまとめた配布資料と授業で使用するプレゼンテーション資料を事前に Teams で公開し (エビデンス①)、事前学習がスムーズにできるように、授業内容を確認して疑問や意見を準備できるように活用した。また、テキストや参考書を指定している科目では併せて予習範囲を指定

した。

青年心理学では、学生自身が青年期の真ただ中で生活していることに目を向けてもらうために単なる理論の説明だけでなく、発達心理学と臨床心理学の両面から興味を持たせる工夫をしている（エビデンス②）

教育心理学と教育相談ではコアカリキュラムに沿った内容だけではなく、実務家教員としての学校臨床の経験（困難事例とその対応、多職種連携）を伝え、学生のスキルアップのイメージがつかめるように生徒役と教師役に分かれたロールプレイを取り入れた（エビデンス②）。また、履修学生が複数のキャンパスにまたがることから今年度初めてオンライン授業形式で開講した。

臨床心理面接特論では、心理専門職に必要な知識を享受するだけではなく、大学院生自身の意識や臨床実践の疑問に回答できるようにテキスト講読を減らして、積極的な授業参加と問題把握力が高まるような反転授業を取り入れる工夫をした（エビデンス②）。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

全ての科目において、授業終了後にリアクションペーパーの提出や **Microsoft Teams** へのコメントを求め、学生の理解とフィードバックを即時授業に取り入れた（エビデンス③）。事前学修の疑問や意見は授業内で回答し、リアクションペーパーやコメントについては必要に応じて **Teams** の各科目チャンネルに回答を掲示して、学生と共有した。

授業の工夫と取組みの結果、「教材の効果的な利用」や「授業のポイント」、「熱意・真剣さ」、「授業の理解」、「総合的な満足」では担当した授業での評価を得ることができた。しかし、質問・発言を行うなどの積極的な態度では昨年に比べて、評価を得ることができなかった（エビデンス④）。

5 今後の目標（これからどうするか）

来年度は学生からの積極的な態度を引き出すことができる新たな取り組みとして、リアクションペーパーの提出や **Microsoft Teams** へのコメントに加えて、授業内容についての振り返り小テストを毎回提出するように変更する。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

① 授業で使用する配布資料とパワーポイント（学生のみ公開）

- ② 2023 年度授業シラバス（公開）
- ③ 提出されたリアクションペーパーと Microsoft Teams へのコメント（非公開）
- ④ 学生授業評価アンケート（公開）

ティーチング・ポートフォリオ

桂瑠以

(記入日：2025年9月2日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

「統計と社会」「心理学演習」「コミュニケーション論」「集団心理学」「特殊実験演習」「心理調査概論」「特殊研究」「卒業論文指導」など

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

教育理念・教育目標として、学生が心理学、とりわけ社会心理学領域に係わる学修を通じて、社会の様々な事柄に対して広く関心や問題意識を持ち、それらの問題を実証的・多角的に考え、主体的に問題解決を行い、社会に貢献していく態度や能力を身に付けられることを目指して教育を行っている。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

学生が主体的・実践的に学修を進めることを目指して、授業法や教材等の工夫を行った。一例として、心理学演習などの授業では、文献検索・収集、発表資料の作成、レジメによる発表、討論を行い、各自が問題意識を持って学修し、学修成果を学生相互で共有し、学修を深められるように指導した。また心理調査概論などの授業では、グループでの質問紙調査、面接調査の実習を行い、調査の目的、調査方法、結果のまとめ方、データ処理の方法等を学修し、実際に調査を実施して、心理調査の方法や仕組みを実践的に学んだ。コミュニケーション論、集団心理学などの授業では、講義にあわせて、毎回、小レポート課題を課し、学修内容の深化を図り、また挙げられた質問には可能な限り次回の授業で回答や説明を行い、双方向でのやりとりになるように努めた。さらに、授業内容に応じてグループワークやグループ学習を取り入れ、グループで意見交換を行い、主体的に学修するように指導した。

4 成果 (どうだったか：結果と評価)

心理学演習、特殊実験演習、心理調査概論などにおいては、学生が主体的・実践的に学修を進め、授業時間外にも事前・事後学習を行い、教員からの指導や学生同士での支援を生かして、発表やレポート作成の質を高めていったことが確

認できた(エビデンス 1, 2)。一方, 学修成果や学修意欲に個人差が生じている様子も見られ, 個別の支援をあわせて行いながら, そうした差異に柔軟に対応していくことが今後の課題と考えられる。

5 今後の目標 (これからどうするか)

学生が, 様々な社会事象や社会の問題に対して広く関心を持ち, 自ら問題解決していけるような実践力を身に付けていくことが今後の目標に挙げられる。また, 学修の意義や目的を理解し, 自ら学修意欲を持って学修に取り組むよう, 授業内容及び授業方法等を今後も工夫していくことが挙げられる。

6 エビデンスとなるもの (資料の種類などの名称)

- 1 小レポート課題, 授業成果物(非公開)
- 2 前期末試験, 期末レポート(非公開)

ティーチング・ポートフォリオ（記入日：2026年2月22日） 簗下成子

1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

心理学ゼミナール（3年通年必修科目 4単位）、臨床心理基礎実習（大学院 通年必修科目 4単位）、臨床心理実習Ⅱ（大学院通年必修科目 4単位）、臨床心理査定演習Ⅰ,Ⅱ（大学院 前期、後期必修科目、各 2単位）深層心理学概論（1）（大学院前期選択科目）精神医学（大学院後期選択科目）等

2 理念（なぜやっているか：教育目標）

教育理念・目標は、学生が臨床心理学の知識と実技を座学と演習、実習により習得し、習得した技術を心理援助に実践できることである。心理臨床専門家としての援助技法を習得する。さらに、臨床心理的援助法の開発と研究手法も身につける。

3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

演習授業の場合、学生が主体的に学べるように、実際にプレイセラピー実施前後の気分変化の採取データ等を用いて各種療法の効果などを記述させる。また、各種心理尺度を体験しフィードバック用のレポートを書くよう指導した。また、ゼミナールの中でも就活スキルと連動する心理学を応用した集団療法的アプローチを行いたい。具体的にはゼミ内でなじみはじめる後期からポジティブな他者評価を送りあい、履歴書に書くべき長所のデータとしてもらった。

実習授業の場合、複数教員担当の授業などでは、教員同士のロールプレイを観察させた後に学生同士のロールプレイを実演し、振り返り、ディスカッションなどを経て心理臨床専門家としての技術を研鑽させた。心理査定演習、深層心理学では、受講者本人の心理テストや芸術療法を行い、解析方法を指導し、本人が自分の心理検査結果や芸術療法の深層心理を解釈し、それによって臨床家としての自分を把握し、より援助者としてふさわしい資質を延ばすように工夫した。心理テストの結果は個人情報に触れるため、教員と一対一でのフィードバックを実施した。また、臨床上、本人が注意すべき点、今後伸ばすべき能力を大学院生と双方向でディスカッションすることで、心理相談センターでのケース担当の準備とした。一方で芸術療法は集団療法等で自分と他者の違いを認めた上でアイデンティティーを確立することに役立つ場合もある為、受講者が全員居る場で本人の解釈を自分で行わせた。それにより集団療法のファシリテーターを任せられるように工夫した。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

演習授業の場合、文献検索の手助けが必要であった。文献検索のこつを逐次教えた。ゼミナール内で就活に役立つ心理学を実践した為なのか、ゼミ生の大半が早期に内定を取得し、全員就職できた。

実習授業の場合、学生が実際に模擬面接を行い、インタビュー方法、利用者とのかかわり方、表現方法などを学ぶことができた。実際のクリニックのケース検討会のオンライン陪席で大学院卒業生達の内容の濃い実践的な話を聞いてディスカッションする実習を継続している。将来現場で知っておくべきこと、立ち居振る舞い、支援内容などを解説してもらった。そのことにより内容は踏み込んだものになり、単に見学に出かけるよりも現場で起こりがちなトラブルや失敗をカバーする手法や、回避する技術をも学ぶことができた。深層心理学の芸術療法のスキルはそのまま心理相談センターのコラージュ集団療法に反映され、受講した学生達が活躍してクライアントのケアにあたり、好評を得ている。

5 今後の目標（これからどうするか）

演習授業では、論文の構造を早めに理解させるために空想論文を書かせ、捏造論文の倫理的な問題点を理解させる。また CHATGPT などの AI の利用方法、盗用と引用の違いを授業の中で実践していく。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

リアクションペーパー(非公開)、心理相談センター会議録(非公開)、心理相談センター管理運営委員会議事録(非公開) 川村学園女子大学心理相談センターHP(公開) 集団コラージュ療法のご案内(2024年5月～)

ティーチング・ポートフォリオ

松岡靖子

(記入日：2025年9月24日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

学部：発達心理学 (2年前期選択必修科目2単位)、教育・学校心理学 (2年後期選択必修科目2単位)、心理演習 (3年通年公認心理師科目4単位) など

大学院：臨床心理実習Ⅱ (大学院2年通年選択必修科目2単位)、教育分野に関する理論と支援の展開 (大学院1年前期選択必修科目2単位) など

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

学生が心に関する幅広い知識を得ることによってその知識を通して学生自身の経験や世の中で起こっている問題を新たな視点から見つめ直し、更に主体的に問題解決の方策を探っていく方法と態度を身につけることを目標として教育を行っている。それにより川村学園女子大学が目指す、激しく変化する社会を柔軟に乗り越えるための「教養」を身に着けた自覚ある女性を育成できると考えている。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

どの講義においても、学生が心理学の知識を自分の経験や世の中の問題とつなげて理解することができるように、知識とつながる具体的な例を多くあげたり、視聴覚教材を利用したりといった工夫を行い、解説している。また、グループワークを取り入れ、自分の考えを伝え、他者と共有し、更に考えを深めるといった経験を重視している。

特に「心理演習」の授業は公認心理師を目指す学生にとっては重要な位置づけであることからすべての回でアクティブラーニングを行っている。特にグループワークに関しては侵襲性の低いグループワークから徐々に自己開示が必要になるグループワークへと段階を追って進められるように年度を通して計画をたてた。はじめは発言が少なかった学生も徐々にグループワークに慣れ、積極的に発言ができるようになってきている。それに伴い、振り返りで Forms に記入される内容も質・ボリューム共に向上した。振り返りの Forms に記入された質問は可能な限り次回講義のはじめに取り上げて回答し、疑問を残しておかないように

するとともに、一方通行ではなく相互のやり取りで講義が構成されるという実感を学生にもたせるように工夫した。

基礎的な知識の獲得を必要とし、持ち込み不可の試験を行っている「発達心理学」については、近年平均点が低下していることが課題であった。学習方法が身についておらず、知識を問われる試験というものへの取り組み方がよくわかっていない学生が多いということが一因と考えられたため、これまでも各回の授業の最初に行ってきたその前の回の振り返り問題の数を増やし、どのように知識が確認されるのかということのイメージを持てるように工夫を行った。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

「心理演習」の振り返りにおいて、それぞれグループワークを通して理解をより深めていることが **Forms** のコメントで確認された（エビデンス1）。

「発達心理学」の試験では、問題の難易度には大きな違いが無いにも関わらず、昨年度よりも平均点が上昇した（55.6点→63.5点）（エビデンス2）

5 今後の目標（これからどうするか）

学生がより社会的事象に興味関心を持ち、心理学的視点から考えることができるように事前事後学修を設定し、学習への取り組み方を具体的に示して進捗を確認していく。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

1. **Forms** 記録（非公開）
2. 発達心理学 試験結果（非公開）

ティーチング・ポートフォリオ

心理学科 氏名 富島 大樹

(記入日：2025年9月30日)

1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

学部 講義科目：社会・集団・家族心理学（前期）、心理学的支援法（後期）

実習科目：心理学実習（入門（後期）、応用（前期））、

演習科目：心理学ゼミナール（前期）

大学院 講義科目：臨床心理学特論（前期・後期）、家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践（後期）

実習科目：臨床心理実習Ⅱ（前期・後期）

2 理念（なぜやっているか：教育目標）

学部課程においては、心理学の広範な知識、研究方法、実践方法を身に付け、研究者、実践家、よい社会人としての基礎的な技能を習得できるように支援する。

大学院課程では、心理学のより専門的な知識、研究方法、実践方法を身に付け、研究者、実践家、よい社会人としての応用的な技能を習得できるように支援する。

さらに女性の社会参加を促進するために、グループワークやディスカッションを取り入れる。

3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

学部課程においては、広範な知識を身に着けるため、授業内容に関連した小課題を毎回課し、定期試験ではその内容から出題し、授業と評価の連続性を明確にしている。さらに、ゼミ、実習では体験と振り返りの機会を増やすように心がけ、体験した学びが定着するように心がけている。

大学院課程においては、専門的な知識を身に着けるために、調べ学習と発表、ディスカッションの時間を多く取り入れた。

まだグループワークでは、役割を毎回ローテーションで交代させ、リーダーとメンバー、書記の役割を体験させ、よりよい社会参加の練習の機会となるようにした。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

学部課程においては、広範な知識を身に着けることに関しては、社会・集団・家族心理学の課題提出率は97.3%でかなり高い水準であった（エビデンス1）。

大学院課程では、心理学のより専門的な知識を身に着けることに関しては、臨床心理学特論において、すべての履修生が調べ学習、発表、ディスカッションに参加し学びを

深めた。

女性の社会参加に関しては、心理学ゼミナールのすべての受講生がリーダー、メンバー、書記の役割を体験して、グループワークの必要な役割を遂行できた。

5 今後の目標（これからどうするか）

今年度の前期は、受講生の能力が比較的高く、ある程度の目標達成ができた。一方で、年度によって学生の能力にはばらつきがあり、困難が生じる可能性が考えられる。授業の開始時にその科目に関連するルーブリックなどを提示し、どの程度達成できそうかといった達成見込みや、目標達成にあたって教員にして欲しい配慮などについて聞き取る時間を設けて、障壁を取り除く努力を加えていきたい。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- 1 小課題（非公開）
- 2 グループの話し合いメモ(非公開)

ティーチング・ポートフォリオ

心理 学科 氏名 平間 さゆり

(記入日：2025年 9月 30日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

<学部>前期：心理的アセスメント、司法犯罪心理学、心理実習（応用）

後期：心理学特殊講義Ⅰ、心理実習（入門）、心理実習（応用）など

<大学院>前期・後期：臨床心理実習Ⅰ（１）、臨床心理実習Ⅰ（２）など

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

心理学に関心を持つ学生に対し、その興味関心が深まり、本学での学びが学生の今後に少しでも役立つことを目指している。これまでの臨床経験で得た心理検査の知識や技術、また、医療現場で行っているカウンセリングを基に、社会の中で職業人として役割を担うなどの実際の現場の臨床について学生に伝えている。これにより、心理職に限らずどのような社会人になるかをイメージし、学生自身で将来像を考えることができるよう導くことを教育目標とする。この学びが社会に何らかの形で貢献することを期待し、学生それぞれの長所を生かした教育を重視している。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

心理アセスメントの授業においては、実際の現場で使用される頻度が高い様々な心理検査について、その心理検査が何をどのように測定できるかの概要を理解する授業を展開している。心理検査の概要を説明した上で、各グループにおいて交代で心理検査の実施者・被験者役を行い、心理検査の実施法を学び、被験者がどのような気持ちで心理検査を受けるのかについて学ぶ。

司法・犯罪心理学の授業では、犯罪や非行が生じるとどのような流れで裁判や受刑となり、再び社会に戻るかについて概観する。犯罪・非行に見られる心理的な特徴や背景等を知り、犯罪の予防の知見、再犯させない取り組み、及び裁判員裁判を視野に入れた授業を展開している。特に、実務経験のある精神鑑定時の心理検査において何がどのように行われ、裁判に必要な所見がどのようなものであるかの知識を積めるよう指導している。さらに、実際の生活の知識として必要とされる、身近な後見人や遺産相続、離婚等の家事事件について、想像しやすい簡易な事例を通して学ぶ。

実習の授業においては、実習当日の学びが深まるように、実習の事前指導に力を入れている。事前指導において、実習先の施設における業務内容、各職員構成、連携先、利用者の様子などを調べ、実習先をイメージさせて学びの目標を持たせることで、自分が何を実習すべきかが明確になるよう指導している。さらに、実習終了後に、実習における自身の行動を振り返り、何をどう学び、自分の課題がなんであるかについて検討することで、行った実習での学びを身に着けられるよう促す授業を展開している。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

心理アセスメントの授業においては、各グループそれぞれで心理検査の実施法が理解できていた。人格・発達・知的能力・認知能力などを測る心理検査の特徴や違いが学べていた。司法犯罪心理学の授業においては、どんな風に事件について検討するのかについての糸口を理解し、裁判の流れや、刑事施設出所後に社会に戻ってくることへの理解が深まった。一方、実習の授業については、事前準備をしっかりとしたことにより、実習中に実習指導者へ適宜適切な質問を行うなどの良好な実習態度がみられた。

5 今後の目標（これからどうするか）

心理検査は、実施が簡単なものから複雑なものまであるため、複雑な検査の説明が不足しがちとなっている。もっと効率の良い実施ポイントやスコアリングを提示できるよう工夫していきたい。また、司法犯罪分野については、そもそも身近に感じられない題材である。学生が想像しやすいニュースなどで報じられている事件を題材に、犯罪や非行についての要因や、その後の受刑や社会復帰などについて考えられるよう、ディスカッションを積極的に行えるような授業を展開することが重要と考える。実習においては、実習先の概要だけではなく、もっと実際の心理職がどのような業務を行い、クライアントに対してどのように関わるかについてイメージできるよう、事前のディスカッションを増やすことを検討したい。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- ① 学生授業評価アンケート（非公開）
- ② 課題レポート（非公開）
- ③ 学生の試験答案（非公開）
- ④ 実習指導者の評価シート（非公開）
- ⑤ 授業内で配布した資料とパワーポイント

(記入日：2026 年 2 月 24 日)

1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

《学部》 公認心理師の職責、臨床心理学概論、心理実習、心理学ゼミナール

《大学院》 臨床心理基礎実習、臨床心理実習 I

2 理念（なぜやっているか：教育目標）

私が専門とする人間性心理学の視点から授業を通し学生の間理解や自己理解を促すことが挙げられる。学生が講義で学んだことをただの概念的知識ではなく自身の身の回りの社会的現象を自身の身体感覚から照らし合わせて考えて、腑に落ちて理解することができるようになることを目指す。これらに加えて、心理臨床の基本的理論や技法を身に付け、他者に対する心理的援助を行うための基盤となるように目指す。

3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

学生自身が抱える学習課題や問題意識の設定から解決に至る機会を作るために、各授業においてワークやディスカッションを行った。

公認心理師の職責や臨床心理学概論では授業の終わりにリアクションペーパーを記入する機会を設け、これらを学生の許可の下、全体に開示しフィードバックを行った。これによって学生が、自己省察を行う機会を作り、心理職になるために必要な人間理解や自己理解を促すことを助けた。また、各授業ごとにグループディスカッションを行う機会を作り、多様な価値観や意見があることを理解してもらった。心理学ゼミナールでは学生自身が設定する研究テーマを設定し、その学生の個性に合わせた個別対応・個別指導の時間を長く取るようにした。それによりできうる限り、その学生らしい研究テーマが設定できるように心がけた。臨床心理基礎実習、臨床心理実習 I では学生一人ひとりにロールプレイや実習の振り返りを求めた。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

公認心理師の職責と臨床心理学概論では、リアクションペーパーを毎回、提出をしてもらい心理職が働く上で必要な基本的知識や考え方に関する理解を促すことが確認できた。中には自身の立場と照らし合わせながら、個人にとって必要な心理支援について考えることもあった。しかし学生に応じて提出にバラツキがあり、受身的に講義を聞いているだけの学生も見られた。心理学ゼミナールでは、学生が主体的に研究テーマを設定することができおり、研究テーマを通して自身が何を学びたいのか自己理解することができている。

臨床心理基礎実習ではロジャース法の基礎的な理論と技法として傾聴する姿勢ができて

いることが確認された。臨床心理実習では、心理職が働く多様な領域に関して理解を促すことができているようであった。また心理実習ではレポートを課すことで各領域における理解を促すとともに、文章の作法を学ぶことができているようであった。

5 今後の目標（これからどうするか）

主体的に学習課題や問題意識を設定することは個々の学生にバラつきがあるように考えられた。こちらでリアクションペーパーのテーマを設定し、その提出を単位の取得条件とすることで、学生がより積極的に講義に対する理解を深めていくことができるようにしたいと考えている。これにより学生がリアクションペーパーによって考える機会が増えていくと考えられる。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- 1 リアクションペーパー（非公開）
- 2 期末試験の答案（非公開）